

# 困窮する女性たちの自立を支援

札幌市 NPO法人女性サポートA s y l (アジュール)

傷ついた女性たちが身を寄せ、新たな生活へ旅立てるようにサポートする団体がある。ギリシャ語で、「侵すことのできない場・聖域・避難所」を意味するアジュールから名付けられた「特定非営利活動法人女性サポートA s y l (以下あじーる)」。DV(ドメスティック・バイオレンス)被害や失業、家族関係の悩みなど、事情を問わず困窮する女性たちが一時的に利用できるシェルターを運営している。

あじーるは特定非営利活動法人ホームレス支援北海道ネットワークが2012年に開設、2015年度からは札幌市生活困窮者自立支援事業「札幌市ホームレス総合相談センターJOIN」の分室(シェルター)となり、2015年9月14日に特定非営利活動法人格を取得した。ちなみにJOINの分室としては、他に札幌市内に3つの施設がある。

あじーるのシェルターは札幌市内に5部屋あり、常時、入所者は4、5人いる。満室の状態が長く続くことも多い。

それぞれの部屋には、冷蔵庫、テレビ、洗濯機、電子レンジなどの一式が揃い、入った日からすぐに生活できるようになっている。入所者の交流の場となるようサロンがあって、

退所後も自分の居場所として自由に使えるように開放されている。

入所者には1日3食が提供され、サロンにある食卓を囲んでボランティア女性が作る料理を食べたり、ホームレス支援団体が運営する食堂を利用したりできる。収入や資産など一定の条件がある場合を除いて、利用料は無料。



利用者が集まって話したり、食事したりするサロン

## ■ 住宅・仕事探しもサポート

入所までの流れとして、JOINの総合相談窓口(フリーダイヤル)に本人や、身近にいる人、警察などから連絡があると、職員が問題の全体像の把握やこれからの方針を決めるため聞き取りし、各分室へつないだり、場合によっては、個々の状況に適した機関を紹介

介したりすることもある。あじーるに直接、電話がかかってきた場合も同様に対応する。また、職員が朝6時半ごろから隔週、札幌駅や狸小路などにいるホームレスの人たちに向けて、「朝回り」をしてパンフレットなどを配布したり、声掛けをしたりしているため、それをきっかけに入所する場合もある。

原則3ヵ月まで利用でき、最大6ヵ月まで延長できるが、入所後の面談では、まず3ヵ月以内で自立できるようプランを作成、そのプランに基づいたサポートを行う。

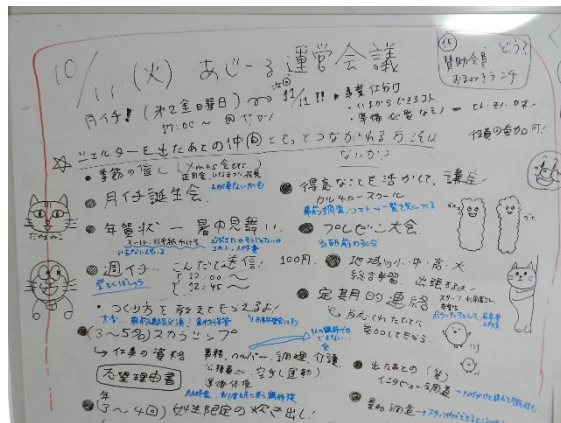
サポートは、生活保護や障害年金などの福祉制度の申請同行から、住宅・仕事探しなどと幅広く、また、リクルートスーツの貸し出しや、職務履歴書などの文書作成や写真撮影など、細やかな就職活動の支援もしている。

入所理由は様々で、配偶者によるDVで離婚後に生活困窮に陥った女性や、家族からの精神的束縛を受けて家出した女性など、家族との関係を理由に利用する人が多いという。

年間平均の利用者は40人ほど。2016年4月から9月末日で、10代から70代まで25件、31人が利用し、そのうち単身者が19人、母子は4件で8人。そのうち40代の単身者が9人で最も多い。夫婦など家族が

2件で5人。女性専用シェルターだが、世帯の支援となると世帯主の父親も含めて受け入れることもある。

最も多い退出時の状況は、生活保護申請で、受給せずに退所した人は少なく、就労自立や家族関係が回復した状態で退所する利用者は少ない。残念ながら、路上生活へ再び戻ってしまった人や失踪、音信不通になる人もいる。ある70代のホームレス女性は入所した初日に鍵を持ったまま行方不明になってしまい、やむなく他の入所者の安全を考え鍵を取り換えたという。



サロンにあるホワイトボードには、運営会議での提案がびっしりと書かれている

## ■ クラウドファンディングや

### 寄付で活動資金やりくり

札幌市の委託事業ではあるが活動資金は不足しているため、2015年にはインターネットで資金を募るクラウドファンディングを実施、75万円を募集したところ、100万円が集まったという。また、新聞でも募ったところ、20万円の寄付金があった。衣類などの寄付もあり、ボランティアがフェイスブックで呼びかけると事務所に入り切れないほど集まったこともあった。衣類や家電などの必要な物品はホームレス支援団体から提供されることもある。

2015年には、シェルター運営だけでなく、助成金を受けながら様々な取り組みを実施。講師を招き、普段生活する上でためになるテーマについて勉強する「ピア・カフェ」を開催し、「ワーカーズカフェ」では福祉制度などの社会問題を主題に、福祉に関わる仕事に従事する人や当事者などとの懇談会を行った。さらに独立行政法人福祉医療機構の助成で、相談室「女性と子どもの安心ルームあじーる」を札幌・ススキノに設置した。現在は、シェルター運営に集中するため、これらの事業は行っていないが、職員や入所者、退所者などが集まり、月に1度実施している運営会議で

は、「得意なことを活かして講座を開きたい」「女性への炊き出しをしたい」など、会議で出された提案を元にこれらにも取り組みたいという。

運営は事務局長を務める波田地利子さんと、松浦聡美さんの2人で行っているが、利用者がボランティアとして支えている。東京都出身で北海道大学文学部卒の波田地さんは、4年前に前述した特定非営利活動法人ホームレス支援北海道ネットワークの職員になり、札幌市出身の松浦さんは北星大学社会福祉学部卒業後、医療事務として病院で働き、昨年9月からあじーるで働き始めた。2人とも大学時代に参加していたホームレス支援を行っている「北海道の労働と福祉を考える会」を通じて職員になった。



職員の波田地さん(左)と松浦さん

「最近は軽度の知的障がいや精神障がいによる被害妄想から家を出てきたのではないかとされる方も増えています。でも本当に家族から虐待を受けている可能性もあり、その判別が難しい。その方の尊厳を尊重しながら信頼関係を築くのは大変なことで、運営に関しても資金やスタッフが足りず現実は厳しい。でも利用者が少しでも何かいい方向に変わってくればという思いで運営しています」と2人は悲喜こもごもに語る。

シェルター経験者からは、「新しいひとと出会って、たわいもない話をするだけでも発見があります。今後はこれまでのキャリアを生かして子供の支援をしてきたい」、「人との繋がりを持てるサロンと、プライバシーが守られている個室のバランスのおかげで自分のペースを取り戻せました。ハローワークの求職者訓練で資格を取得し、仕事を見つけない」などの声もあり、2人がひたむきに続ける真摯な活動は、数多くの女性たちの心に響いているに違いない。

■ 連絡先

〒001-0023  
札幌市北区北 30 条西 4 丁目 2-27-203  
NPO法人 女性サポートAsyl  
理事長 吉中 季子（よしなか としこ）  
事務局長 波田地 利子（はたち としこ）

TEL : 011-299-5579  
Email : [asyl-chan@kf6.so-net.ne.jp](mailto:asyl-chan@kf6.so-net.ne.jp)  
URL : <http://asyl-chan.jimdo.com/>